

医療安全の基本戦略 - 医療安全フォーラム北大 2007 の意義

国際予防医学リスクマネジメント連盟理事長

日本予防医学リスクマネジメント学会理事長

酒井亮二

日本の医療界が医療安全の問題に取り組みを開始して 10 年以上の歳月が流れる中、医療事故に対する日本での取り組みはここ数年間に特に進歩が著しく、世界最高水準に到達をするまでに目覚ましい進化を遂げています。その結果、日本での今日は、医療安全についてわれわれはどこに向かうのかという問い、つまり、日本での医療安全の今後の基本戦略は何かを考える時期にさしかかりました。このためには、過去の政策と対策に対する学術的な評価が必要です。

世界と日本の学会の学会理念に明記されているように、安全の政策と対策を定量的に実証評価することが基本とされております。日本では数年前には、リスク科学の専門家である顧問の諸先生に対して安全とリスクの関係のご検討をお願いし、「安全対策がどの程度までリスクを低減できたかを知ることによってのみ安全活動の効果は実証評価ができるので、安全対策はリスクを定量するのが基本である」というご報告を得ました。つまり、安全研究は定量可能なリスクの観点で進めるべきで、安全管理はリスクマネジメントから行うべきである、とのことです。

日本でのリスク科学の最高権威者の方々によるこの学術的結論は、本学会の特徴である「リスク学を基盤として様々な安全問題を科学的に展開する」という学会憲章が学問として正しいことを検証されたものです。日本の医療界の一部には、欧米で 50 年以上にわたり学術として発展しているリスク科学をあまり理解されない、知の貧困による誤説の言動が最近に多々見受けられます。これは、日本医療界ではリスクマネジメントが話題となって数年しか経ていないため、日本の医療にはリスクマネジメント学の高度な学術専門家がかなり少ないことによります。世界学会ではこの様な混乱の報告はなく、わずか 5 年間の間に、多数の国際行政機関と欧米諸国を含む全世界 70 カ国以上に会員が普及しています。

医療安全対策の学術評価は、6 月にカナダで開催する第 2 回アメリカ大陸予防医学リスクマネジメント学会学術総会で欧米の医療安全対策に対して実施されます。日本では、北海道で 5 月に開催される医療安全フォーラムにおいて、日本の医療安全対策の諸活動を報告いただき、リスク科学の立場から評価を行い、今後の日本の医療安全の基本戦略を見出すという、日本の医療界で最初の医療安全対策の評価が行われます。